
人魚

J.S.アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚

【Nコード】

N1097A

【作者名】

J・S・アルト

【あらすじ】

中学生の響は青い夢の中にいた。その夢から響の奇妙な日々が始まる。

第1話：蒼い夢（前書き）

今回初めての小説なので、読みにくい部分があるかもしれませんが、最後まで読んでくださるととっても嬉しいです。

第1話：蒼い夢

青年はゆつくりと周りを見回した。すると、澄み切った水の向こうから人影らしきものが見えた。淡いオレンジの髪をした、女の人の影。

けれど、その人影は普通の人とは少し違った。まず、酸素ボンベのようなものは、一切つけていない。

人影に足のようなものはなく、かわりにひれがついていた。

その、人のような影はものすごい速さで青年の方へ向ってくる。

ひびき
「響。」

「誰?。」

「私はマーメイド、貴方の夢の住人よ。」

「知らない。どうして・・・僕の名前を知ってるの?。」

「貴方が産まれる前から知ってるわ。」

マーメイドは微笑みながらそう答えた。

「ここは・・・?。」

「言ったでしょ? 私は貴方の夢の住人だって。」

「じゃあ、ここは僕の夢の中?。」

「そうよ。私は響の中にいるの。さあ、いきましょう。」

「いいくつてどこに!?。」

二人の後ろにはイルカの群れがせまっている。

響とマーメイドはイルカの群れに囲まれながら泳いだ。イルカと泳いでいるうちに、響はだんだん楽しくなってきた。

響の気持ちが変わり始めると、それまで水草しか生えていなかった海のそこに、珊瑚や磯巾着、魚が泳ぎだした。

「あれ? さかなが。それに珊瑚も・・・。」

「不思議? ここは貴方の夢の中よ。貴方の気持ちしだいでいろんなものがでてくるわ。」

「じゃあ、なんで君が出てきたんだ?。」

「それはね・・・あなたが恋しく思ったからよ。」

「誰を?。」

「l:::l s p m@、k v n k i 5 8 9 k z , , , : . m。」

「えっ?何?よく聞こえない。」

「マーメイドの声がよく聞こえないと思ったら、だんだん周りがぼやけてきて、最後には真っ暗になった。」

第2話：事故&花束

どたっ

「あり?。」

ベッドから落ちた響は夢の世界から一気に現実世界に引き戻された。マーマイドの言っていた事がききとれなかった響は、半分やるせない気分になった。

「あーくそっ!!だれなんだよ!。」

「響ー!朝ごはんだよー。でておいでー。」

そう呼ばれて響は学校の制服に着替え、階下に降りていった。

「いいかげんにしてくれないかな?毎回僕を呼ぶのに「でておいで

ー」なんていうのやめてくれる?。」

「どうして?。」

「・・・犬みたいでやなんだよ。」

「わかったわ。おっと、もうこんな時間。響、あとよろしくね。」

「うーい。」

「遥^{ハルカ}、車に気をつけるんだぞ。」

「はい。いつてきまーす。お母さんいつてきまーす。」

「いつてらっしゃーい。」

響とお父さんのハモリで姉は送りだされた。

え?お母さんがいない?まあそれはいずれ説明しよう。

今日は夏休み明けの始業式だ。休み明けとはいってもまだまだ暑い。

朝とは思えない日差しの中、なるべく影の道を歩いて登校する。

「おはよう!響君!。」

すると、目の前に一人の女の子。同級生らしい。

「お、おはよう。」

不意をつかれたので、いささかびっくりした様子だ。

どうでもいいことだが、響は遠くから見ると意外とカッコいい。

すらつと伸びた背に半袖のホワイトシャツとネクタイがかつこよくきまっている。

右手には腕時計をしている。黒い髪は短くつややかだ。

女の子の方はそんなに背は高くはないが、容姿はかわいかった。

半袖のホワイトシャツに赤いチェックのスカートをはいて、長い髪は二つに束ねられ、三つ編みになっている。

そうそう、女の子の名前は・・・

「明日香、前。」

「前?。」

ガンッ

「前みて歩けよ。」

「ふあい。そうしまふ。」

学校について、始業式が始まった。

「でわ、校長先生から一言お願いします。」

「おほん！残念ながら、悲しいお知らせが1つあります。本校の生徒、一人が事故に遭いました。」

校長がそう話すと、体育館の中はざわめいた。

「お静かに！。校長、続きを。」

「自転車に乗ってふらつと飛び出して・・・よけ切れなかったそうです。皆さん、くれぐれも気をつけてください。」

式が終わって家に帰る途中に、響は教室に忘れ物をしていたことを思い出した。

急いで学校に引き返し、教室に向かった。教室のドアをあけて自分の机に向かうと、そこにはひとつの花束が置いてあった。

響はただの悪戯だと思い

「なんだよこれ。俺はあの世の人じゃないっつーの!!。」
と、なじった。

とりあえず花束をどうしようかと思い、教室にあった花瓶に花束を生けておいた。

帰り道、人通りの少ない道を一人歩いていると、突然大きな音をたててトラックが走ってきた。

「なんで……。」

響はその場から動けなくなった。頭ではわかっているのだが、体が言うことをきいてくれない。

「動け……動いて……。」

トラックはどんどん近づいてくる。

「あぶないっつー!!。」

誰かが響を横から突き飛ばした。トラックが通り過ぎ、後には響と女の子が残った。

「いつて……。」

「大丈夫？ダメじゃない、ボーっとしてちゃ。」

「すみません。ってどなたですか?。」

「え?あたし?あたしは……ただの通りすがり。気にしないでいいよ。」

「でも……。」

「あたし、急いでるから。お大事にね。」

「あ、はい。ありがとうございました。」

そういつて女の子と別れると、響は変な気持ちになった。

「どこかで見たことがあるんだよね……。」

でもそんなことはすぐに忘れた。

家に着くと、すぐに寝てしまった。また夢を見た。青い海だか空だかわからないような景色だ。

人魚がいる……。人魚が俺に話し掛けてきた。

「どうだった?一日目は。」

「……え?一日目……?。」

半分ぼんやりとした頭でそう答えた。

「そう。一日目。早く日がたつといいわね。」

そう言う人魚は泡になって消えた。人魚が消えるときに、響は人魚の顔をみた。

顔を見ると、響は「あいつに似てる・・・。」とぼんやり思った。

第2話：事故&花束（後書き）

え〜つと。人魚の第二話です。読みにくかったらすみません。
話の内容がよくわからないときがあると思いますが、それも話の流れなので
あ〜こんななんだ〜って読み流してもらって構いませんので・・。これからも
「人魚」をよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097a/>

人魚

2011年1月26日06時45分発行